

女性のエンパワーメント－ウーマン・アイを通して 2 ボリビアの鉱山と働く女性－標高 4000mの地で働いて－ 井上 朋美

はじめに

南米大陸のほぼ中央部に位置するボリビア多民族国。面積は日本の約3倍、その3分の1近くをアンデス山脈が占めており、国内の主要都市の半分近くが標高 2,500 から 4,000m に位置する。筆者の職場も例にもれず、標高約 4,000m の高地にある。筆者は、ボリビアの中心都市ラパスから飛行機で南へ1時間程行った、ポトシ県に位置するサンクリストバル鉱山に2014年4月より赴任している。ポトシ県には世界最大級かつ観光地としても有名なウユニ塩湖がある。ボリビアは鉱物資源に恵まれた国であり古くから鉱山業が営まれてきたが、同鉱山でも鉱石を採掘し、中間製品である鉛・亜鉛精鉱（夫々銀を含む）を輸出している。世界レベルの鉱山運営をビジョンとして掲げ、日々安定した操業をしており、同国内でもモデル事業といわれている。

本稿では、同鉱山にて勤務する唯一の日本人女性として、ボリビアの、特に同鉱山における働く女性に焦点を当ててみていきたい。



サンクリストバル鉱山の位置（Minera San Cristobal S.A. 提供）

ボリビアの女性

まず、国全体を考えると、ボリビアは男性優位社会といわれており、近年改善傾向にあるものの、教育・経済参加の機会是一般的に女性より男性に多く与えられ、識字率も男性の方が高い¹。

また、ラテンアメリカ諸国の中でもインディヘナと呼ばれる先住民の割合が高く、人口の半数近くを占めている。現在でも三つ編みに裾の広がったスカートという伝統的の衣服に身を包む女性の姿を多くみかけるが、インディヘナの女性の中には、ケチュア語やアイマラ語等の先住民言語を使用する一方で公用語であるスペイン語を解さない者もいる。これら先住民言語も公用語として認められてはいるが²、スペイン語を解さないせいで就業機会が限られているケースもある。インディヘナの女性が家政婦やベビーシッター、また路上での物売り等インフォーマルな仕事に従事する姿もみかける。

マクロな数字をみても、2014年の Gender Gap Index（142カ国の健康、教育、経済、政治における男女間の格差を指標で順位付けしているもの）は世界58位、経済活動への参加だけをとると99位と、同年の日本の104位、102位に比べると同程度若しくは多少進んでいるとみえるが、まだまだ課題は多いだろう³。

鉱山における働く女性

次に、サンクリストバル鉱山で働く女性についてみていくが、鉱山と女性の働く姿は結びつかないかもしれない。実際にボリビアにある伝統的・旧来型鉱山では女性の職場参加は大きく制限されている。厳しい職場と見做されることの多い鉱山業は男性社会・男性の職場だというのが一般的な認識ではないだろうか。

同鉱山は標高 4,000m に位置するため、低地出身者にとっては高地順応が鍵となる。高地順応できずに高山病に罹る人も少なくなく、人によっては激しい頭痛に襲われたり、何日も不眠状態に陥る。生活可能なレベルに順応できたとしても、少し坂や階段を上がるだけで息切れをしてしまったり、眠りが浅くなってしまいう人は多く、低地にいる時より疲れが貯まりやすい。

気候は1年の中では雨季と乾季に大きく分かれるが、一日の中で寒暖差の大きい高山気候であり、日中には強烈な日差しが近距離から照りつける一方で朝晩は雨季でも氷点下近くまで冷え込む。乾季は乾燥が激しく、氷点下 15 度程まで気温が下がる。

同鉱山サイトは近隣都市から隔たったところにある

ので、一定期間集中して働き、その分集中して休むという勤務体系をとっている。鉱山サイトにいる間は土日もなく勤務し、敷地内にて同僚と共同生活を送る。そして何日か連続して休みを得て、ボリビア人であれば地元の街へ長距離バスや飛行機を利用して帰る。敷地内では電気や温水シャワー等基礎的なインフラを整えてはいるが、通信環境は良好とはいえず、娯楽施設や気軽に買い物にいけるようなスーパー等はない。安全・労務管理の観点から敷地内は禁酒で、酒類の持ち込みも禁止されており、発覚すれば解雇につながる。

このような、「厳しい」とされている職場であるが、男性だけではなく、ボリビア人女性の活躍もみられる。ここサンクリストバル鉱山では約 1,500 名の職員のうち、凡そ 200 名、13% が女性であり、更にそのうち鉱山サイト近隣地域出身の女性職員は 100 名程である。その他、ラパスなどその他の都市から働きに出てきている女性も多い。

鉱山業といえど業務内容は多岐に渡る。鉱石の採掘現場、採掘した鉱石から精鉱を生産する選鉱プラントのほか、財務・経理・法務・人事系の部署や、環境・CSR、サプライチェーン、安全管理など多様な仕事があり、様々な部署でボリビア人女性職員の活躍がみられる。採掘現場で 200 トントラックや大型ショベル・ドリルを運転する女性もあり、「こんな大きな重機の運転、怖くないの」と筆者が尋ねると、「怖くないよ」と笑顔で返事がきた。また、上位の役職につき、年上の男性職員に堂々と指示を送る女性もいる。

また、女性職員の中には「働くお母さん」も多い。サンクリストバル鉱山で働く女性職員の平均年齢は 38 歳であり、子持ちで働く女性は 140 名弱、全女性職員の約 70% に当たる。子持ちの女性職員の中にはシング

ルマザーも少なくない。同鉱山では産休制度を整えており、妊娠・出産を経て復職する職員も少なくなく、周りの職員も極自然に休職・復職を受け入れているように感じる。

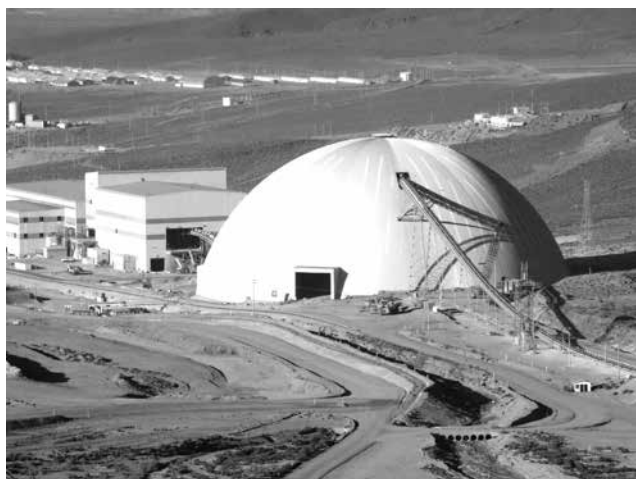
「鉱山労働は男性の仕事」という認識は肉体労働・力仕事メインの鉱山には頷けるものであるかもしれない。確かに、ボリビアには現在もそのような鉱山は存在する。しかし、近代化・機械化が進んだ鉱山においては女性の活躍の場は広がっている。「広がっている」というより、男女の垣根が低くなっているように思われる。

憧れの鉱山で働く

現在筆者は日本人としては唯一の女性職員であるが、この現場で働くことはかねてよりの希望であった。筆者とサンクリストバル鉱山との出会いは 2008 年にさかのぼる。当時開発援助に興味をもっており、現場を知りたいという思いで大学在学時にペルーへ留学したが、留学中に、地域の経済・教育などの環境を抜本的に変えてしまえるような仕組みはないかと模索していた。そんな時に出会ったのが、2007 年 9 月に操業を始めたばかりのサンクリストバル鉱山であった。調べてみると、ボリビアの地方にて鉱山開発を行っており、地元地域の資源を一方的に採掘するのではなく、雇用や利益創出による経済的貢献に加え、地域の文化を尊重しながら、共同で発展していこうという姿勢で開発・操業していることが分かった。

鉱山事業を行ううえでは、安定した操業を行うことはもちろん、地元地域との共生が必要不可欠である。これを軽視し、地元住民の反対運動等により操業停止に追い込まれた鉱山の例は多い。

サンクリストバル鉱山では、これまで鉱山開発に伴って道路、橋、上下水道、送電線、病院、学校、携帯基地局等を建設しており、地元地域のインフラの整備は劇的に進んだ。また、雇用創出効果も大きく、先述の通り 1,500 名いる社員のうち 98% はボリビア人であるが、そのなかでも 60% 以上が地元ポトシ県出身であり、さらに近隣コミュニティ出身者は全社員の 50% 近くを占める。直接雇用のほかにも、同鉱山の開発・操業に伴う周辺産業の発達も著しく、間接雇用も多く創出している。



2011 年に完成した粉じん飛散防止ドーム (Minera San Cristobal S.A. 提供)

インフラ整備・雇用創出に加えて、地域貢献として、

地域の自立支援も行っている。鉱山には寿命があり、いつか生産を終えて閉山する。よって、閉山後も地元地域が発展していけるような自立への支援を重視している。例として、サンクリストバル技術訓練センターの設立が挙げられる。ここでは鉱山で働く従業員はもちろん、近隣住民も対象に、鉱山で必要とされる技術教育のほか、英語や IT などの教育訓練も行っている。

更に、環境対策にも積極的に取り組んでおり、例えば 2011 年 9 月には、鉱石の貯蔵場から粉じんが風で飛散するのを防ぐ大型ドームを建設した。これは行政の指導によるものではなく、1,000 万ドル以上の建設費用をかけて自発的に実施したものであり、現地でも鉱山事業の「お手本」と受け止められた。

地元住民への雇用の創出、教育機会の提供、保健・医療の整備、環境対策…民間企業の大型投資・鉱山事業の裏には、地域との共同発展にむけた日々のきめ細やか且つ地道な活動が垣間見えた。



採掘現場にて、同僚（ボリビア人女性）と筆者（筆者撮影）

このような職場で働けたら、日本と相手国、双方の発展の一助となることができたなら…そんな思いでサンクリストバル鉱山事業に 100% 出資している住友商事に 2011 年に入社し、4 年目の春、憧れの地へ赴任した。厳しい職場だという話は聞いていたが、赴任を迷う理由にはならなかった。

また、この地で働けるようになったのは、上司の理解・後押しや、先輩女性職員の存在が大きい。筆者は当地での初めての日本人女性職員というわけではなく、既に鉱山サイトやラパス本社へ派遣されていた先輩女性職員が活躍していた。おかげで、「女性だから」という理由で反対されることもなく、希望がかなって赴任が

決まったのだと感じている。

実際に赴任してみて、少なくとも「女性」という理由で不利な思いをしたことはない。高地順応には個人差があるが、環境の厳しさに耐えられるか否かに男女の差はほとんどないだろう。資源開発の最前線である鉱山サイトにて、同鉱山の更なる発展の一助となることで、諸先輩女性職員が切り開いてくれた道を次につなげていきたい。

おわりに

ボリビア全体でみると女性の社会進出にはまだまだ課題は多いが、一方で、同僚として一緒に鉱山で働く女性の力強い姿からは今後の女性の社会進出を期待させられる。女性だからと必要以上に感じていない、感じさせないたくましさがあり、筆者もそんなボリビア人女性の姿に励まされ、また背筋の伸びる思いがしている。鉱山のように、従来は男性社会だと見做されていた職場でも、近代化が進むにつれて性差は問題ではなくなっていく、女性の活躍の場は広がっていくだろう。

（いのうえ ともみ 住友商事株式会社 鉛・亜鉛事業部、
Minera San Cristobal S.A. 出向）

- 1 “The Situation of Women in Bolivia” . UNICEF. Retrieved 25 February 2012
- 2 ケチュア語、アイマラ語、グアラニー語等 36 の先住民言語も国の公用語とされている。
- 3 “The Global Gender Gap Report 2014” . World Economic Forum, pp.8-9